

塚田晃信編

類題法文和歌集注解

二

古典文庫

塚田晃信編

類題法文和歌集注解

古典文庫

古典文庫第四七三冊

昭和六十一年二月二十日印刷発行

非売品

類題法文和歌集注解

(二)

編者 塚田晃信

発行者 吉田幸一

印刷者 白橋印刷所

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

目次

類題法文和歌集注解卷第五

天台宗

妙法蓮華經

第十二 提婆達多品……………七

第十三 勸持品……………二四

第十四 安樂行品……………三五

類題法文和歌集注解卷第六

第十五 從地涌出品……………五

第十六 如來壽量品……………六

第十七	分別功德品·····	九二
-----	------------	----

第十八	隨喜功德品·····	一〇五
-----	------------	-----

類題法文和歌集注解卷第七

第十九	法師功德品·····	一二五
-----	------------	-----

第二十	常不輕菩薩品·····	一二五
-----	-------------	-----

第二十一	如來神力品·····	一三五
------	------------	-----

第二十二	囑累品·····	一四七
------	----------	-----

第二十三	藥王菩薩本事品·····	一五七
------	--------------	-----

類題法文和歌集注解卷第八

第二十四	妙音菩薩品·····	一八三
------	------------	-----

第二十五	觀世音菩薩普門品·····	一九二
------	---------------	-----

類題法文和歌集注解卷第九

第二十六 陀羅尼品……………二三

第二十七 妙莊嚴王本事品……………二四〇

第二十八 普賢菩薩勸發品……………二五四

法華結經・觀普賢行經……………二五九

類題法文和歌集注解卷第十

天台宗

止觀……………二六六

三諦……………二六九

輔行弘決……………三二六

類題法文和歌集注解

自卷五——至卷十

類題法文和歌集注解卷第五

法華經

提婆達多品第十二

此品も流通なり。上の三周八品の間には声聞授記作仏をあかせり。法師品には仏在世又は滅後にも此經の一偈一句をたもたんものは三菩提に至るへしと説玉へり。皆善人の成仏にてもとよりことほりなる義也。仏道は平等なれば、かならずしも善人のみ成仏して惡人の一闡提や又女人などの成仏かなひかたくは平等といふへからず。よりて此品には善惡不二を証して惡人女人も成仏せる証拠を示し玉ふ。提婆は惡

人なり。竜女は女人也。此二人ともに此品にて成仏せるは、其証拠なり。偽秦の世に羅什法師の草堂寺にて法花経を翻譯して廿八品となしておこなはれける後に此品を長安の宮人のこひうけてとめて内裏に有て外に出ささりし故世には廿七品のみそ侍りし。其程は芬陀利薩曇経をもて添品せしよし也。その後梁の世に滿法師といふ人ありて長安にて此品を得て、こゝにはをけり。それより後南岳大師これをもて宝塔品の後につきてむかしの正法花経をもてかうかへしてたかはさりければ、これよりそまたくいにしへに歸りて今の廿八品にはなりぬ。提婆といへるか悪人なりし事人あまねくしれり。されと是か善知識となりて仏の悟をひらき玉ひし故にかくは成仏の記をもあたへし也。ひそかにおもふに此品をこゝにいたせる事すこしつきなきやうにおほゆ

れと、はしめに多宝仏の侍者なる智積菩薩の仏をして本土にかへらんことをこへる事あれば、上の品の便なきにあらず。其上むかしよりの伝受に上の宝塔品は理性の即身成仏をとき、此品は事相の即身成仏をとけるよしを申き。又初には提婆か因位の阿私仙と申せし時、弘経して世尊の成道をなさしめ玉ひし故に、前の品の法花受持のつゐてにこゝにはのせき。又文殊の通経とて竜宮にて竜女に得度せしめ玉ひて流通せし故に、こゝにこれをのせつるよし申。いづれもことはりにおほえ侍る。其次に勸持品を出して大菩薩の此経を弘通し玉ふことにわたれる故、次第あきらかにてはへる也。まことに此品は法花八講のなかはの日にあたりて、薪おひてかந்தちめまで行道し玉ふなるは千歳給仕のむかしまで思ひ出られてやさしくめてたき法会にてこそ侍れ。

詠提婆達多品和歌

金 新勅

古九法の為になふ薪にことよせてやかて浮世をこりそはてぬる

瞻西上人

此句は此品にいはく、むかし過去に世尊の法花經をもとめ玉ひし事をこたりなかりき。其時国王と生れ玉ひて、名をは須頭檀王と申つ。法を求める心退転せずして六波羅蜜を行せん為に布施をなして、象馬七珍国城妻子奴婢をよひ頭目髓腦まで、おします人にあたへんの心ありき。時に王位を捨て政をは太子にゆつりて金鼓を打て四方にのべつけて、もし大乘法をしる人あらは我それにつかへて身をおふるまでやつこのつとめをせんと玉へり。其時にひとりの仙人ありて、来りて王に告ていはく、我大乘をたもてり。妙法蓮花經といへり。よく我に仕へはをしへんと告たり。王こゝにをいて大によろこひて仙人にしたかひ行て、それか為に菓をとり、水をくみ、薪をひろひ、食をつくりて、それか上に身をもて、其ゆかとして心にをこたりうむ事なかりき。それより仕ふる事、千歳にして此法を得たりとの玉へり。その時の王は世尊なり。その仙人はやか

て提婆達多なりけり。ゆへに今仏のかく成道し玉へるは、提婆によれるなれば
誠の善知識と言へし。かくあるか故に提婆は無量劫を過て作仏して天王如来と
言へしと授記し玉ふ也。此歌も此薪こりける事をよめる也。行基歌に法花經を
我得しことは薪こりなつみ水くみつかへてそえしといへるも此心なり。

金

七〇 けふそしるわしの高ねにてる月を谷河汲し人の影とは 師 時

千歳給仕に水くみつる事をよめり。

千

七二 千年まで結ひし水も露斗我身の為と思ひやはせし 覚 雅

同

七三 谷水を結へは移る影のみや千年を送る友となりけん 顯 昭

前と同じ心也。

新古

七三 わたつ海のそこよりきつる程もなく此身なからに身をそきはむる

竜女成仏の心なり。

新勅

七四 法の為身をしたかへし仙人にかへりて道のしるへをそする

続拾

慶忠法印

七五 もとめける御法の道の深ければ氷をたゞく谷川の水

定家

千歳給仕也。

新千

七六 今こそは思ひとかるれ千年までもとめし法の花の下ひも

実超

千歳給仕して法花経をもとめたる事也。

新続古

七七 何となく泪の玉やこほれけん峯の菓を拾ふ袂に

寂然

千歳給仕して法花を求め玉ふ感涙の心也。

山家

七八 これやさは年つもるまでこりつめし法にあふこの薪なるらん 西 行

千歳給仕也。薪をになふ物にあふごとくといへるある也。それを法にあふ事によせたる也。古今歌に人こふることをおもにとになひもてあふこなきこそわひしかりけれといへるより出たり。

同

七九 いかにしてきくことのかく安からんあたに思ひて得つる法かは 同

法花を得たる事のかたきをいへり。

同

七〇 いさきよき玉を心にみかき出ていはけなき身に悟をそ得し 同

竜女成仏の事也。そのゆへは此品に文殊の竜宮に入玉ひて此経を弘通し玉へるに、竜王の女の八歳になりけるか、やかて智慧利根にして、よく衆生の業引よりはしめて諸仏甚深の秘藏をしりてふかく禅定にいりつゝしはし此程に菩提心を発せるありけり。そのよしを靈山会上にて文殊の玉へるに智積菩薩ならひに舍利弗のともから皆うたかひおもひし程に、忽にその竜女のきたり現して

我大乘教をひらけり。久しからずして菩提を証せん此事は仏のみ証知し玉ふへしといへり。舍利弗いよいよ不審におもひていはく、女身には五障とて仏になるへからざるもの五あり。一に梵王、二に帝釈、三に魔王、四に転輪王、五に仏となるへからずとて露もうけかはさりしかは、竜女一の如意宝珠を得てこれを仏にたてまつりしに仏はこれをうけ玉ひつ。そこにして竜女の智積舍利子にかたりていはく、われ宝珠を獻しつ。仏のうけ玉へるは成仏を証するにあらずやといひつ。時をかへす竜女たゝちに男子と變して菩薩行を具して卅二相八十種好のこるかたなくそなはりて、すなはち南方無垢世界に至りて妙法を演説しき。こゝにをいて菩薩声聞八部のともからことごとく信をおこして菩提心を発せるよししるせり。歌の心これをよめり。

長秋

古三袖の上の玉の光の程もなく南の空の月と澄けん

俊成

拾愚草

古三女郎花かけゝる玉のあとしあれば消し上葉の露な乱そ

定家